

論文

在日フィリピン人シングルマザーと子どもたちの「断絶」と「つながり」の連なりに寄り添う

鈴木 健 カラカサン～移住女性のためのエンパワメントセンター

キーワード：在日フィリピン人, シングルマザー, NGO

近年、在日フィリピン人女性のシングルマザーと子どもたちが増加の一途をたどっている。彼女たちの多くは、エンターテイナーとして来日し、日本人男性と出会い、結婚し、暴力をふるわれていった。そして、暴力から逃れ、子どもたちとこの日本社会で生き抜くことを決意していく。

シングルマザーとしての生活は困難なことの連続だ。仕事、子どもの成長、母子関係、本国の家族との関係、そして自分自身の健康など多くの困難に直面している。

こうしたシングルマザーと子どもたちを支えるNGOがカラカサンだ。在日フィリピン人が中心となり、DVサバイバーである外国籍女性たちのためのフォローアップケアプログラムや子どもたちのためのプログラムなどを実施している。

シングルマザーと子どもたちはカラカサンを通じて出会い、「つながり」を作っていく。実際に、地域での生活のなかでその「つながり」が豊かにいきている。そして、その「つながり」のなかで悪戦苦闘しながら生き抜いている。しかし、日々の生活の困難さなどから仲たがいにし、その「つながり」を「断絶」し、孤立する。そして、その関係回復を援助することにより、また「つながり」を再構築していく。地域での彼女たちの関係性は「つながり」と「断絶」の連続である。

カラカサンの役割は、こうした彼女たちの生活に寄り添いながら彼女たちが孤立することなく生き抜くことができるよう支えることではないだろうか。

1 はじめに

「グギャ〜、グギャ〜。マミー、どこ？」 幼子の声が響き渡る。私が関わっている「カラカサン～移住女性のためのエンパワメントセンター」というNGOの事務所に居た2008年のある日のことだった。フィリピン人のお母さんがほんの少しトイレにいき、子どもから離れた瞬間のことだ。子どもは急激に怯え始めた。まるでこの世には絶望しかないかのように。

同じような声を今から10年以上前の1998年に聞かされたことを私は今でも鮮明に覚えている。当

時、私が勤めていた、カトリック横浜教区滞日外国人と連帯する会という団体の事務所。日本人と結婚したものの、暴力をふるわれ、逃げてきたフィリピン人女性とその子ども。当時、上の子はまだ3～4歳だったろうか。そして、下の子はまだ生まれたばかりだった。女性がこれからの生活の相談をしている間、私は、子どもの相手をしていた。「キィー、ギィー」と金切り声のような叫び声を上げながら、その子どもは事務所にあった紙をひたすら破り続けた。もう止められないと思った私も一緒になって紙を破った。あれから10年。今、その子も中学生の歳になった。しかし、学校には行っていない。随分長いこと行っていない。その間、母親にも多くの出来事があった。元の配偶者が自分より若い、新たなフィリピン人と結婚し、毎日酒を煽っていた日々。新しい恋人との出会い。脳卒中で倒れ、病院に緊急搬送されたこと。日本での生活が長くなるにつれ、段々とこんがらがっていく人生。その糸はもうまっすぐには戻らないかのようだ。彼女はそんな人生に疲れ、他者との回路を次々と絶っていく。様々な公的な支援、民間の支援、ありとあらゆる支援を拒否する。それは彼女だけでない。彼女の娘も同じように振る舞う。様々な「つながり」からこの地に辿り着き、そして、その「つながり」に傷ついていき、「断絶」を選んでいく。

今起きていることと10年前に起きたことが、時間をつらぬき重なり合う。一体、今、私の目の前で泣き叫んでいる幼子は何に怯えているのだろうか。この子がこの世に到着してから今までの決して長くはない道のりにどれだけの苦悩があったのだろうか。これから先の長い長い道の中でこの子にはどのような将来が待っているのだろうか。そして、母であるフィリピン人女性は、この日本社会の中で誰との「つながり」ももたず、孤立している。彼女のこれまでの人生において何があったのか。これからも「つながり」の中に入っていくことはないのだろうか。

彼女たちは、エンターテイナーとして来日し、日本人男性と出会い、結婚し、暴力をふるわれていった。そして、暴力から逃れ、子どもたちとこの日本社会で生き抜くことを決意していった。しかし、地域での生活は悪戦苦闘の連続だった。しばしば社会から隔絶され、孤立してしまう。

本稿では、そうした彼女たちのこれまでの歩みと今の姿を見つめ直し、カラカサンの果たしている役割を考えてみたい。

2 フィリピンから日本への人の流れ

現在、在日フィリピン人は約20万人(2007年末)。永住者が67,000人、日本人の配偶者が51,000人、定住者が33,000人。男性が44,000人に対して、女性が158,000人となっている。この中には、非正規滞在者は含まれておらず(外国人登録をしていない場合)、その数は、男性8,000人、女性約17,000人の合計25,000人程度いるといわれている(2008年1月現在)。その他にも、毎年5,000人ずつ増えている日本国籍の子どもたちもいるし、日本国籍に帰化したフィリピン出身者も徐々に増えている。家事労働者やITエンジニアとして日本で働いている人も増加しているし、日系人研修生として来日する人もいる。在日フィリピン人と一言でいってもその姿は多様である。フィリピンでの出身地域、そして来日した年もかなりの幅がある。2世が大きくなり、3世の子どもたちも徐々に生まれつつある。

フィリピンから日本への人の流れを振り返ってみると、戦後まもなくの時期には、アメリカ軍属として沖縄などに来ていた。その中には沖縄の女性と国際結婚をしていった人たちもいる。1970年代にはフィリピンバンドが各地のディスコなどで活躍していた。そして、1980年代以降、エンターテイナー、非正規滞在の労働者、国際結婚をした人が増加していった。ニューカマー外国人と呼ばれていたにもかかわらず、その歴史は意外にも長い。そう、在日フィリピン人はもともとニューカマーの先駆けであったのだ。最近では、1980年代に来日した人たちが後から来日した人たちのことをニューカマーと呼ぶ時代になってきている。もはやニューカマーの時代なのではなく、ニューカマーのニューカマーの時代になっているのだ。

在日フィリピン人は、女性が約18万人に対し、男性が約5万人と圧倒的に女性が多い。かつてはエンターテイナーとして来日する人が多かった。そして、日本人と国際結婚した人、最近ではシングルマザーとして生活している人が多い。

エンターテイナーとして来日する人は、全盛期には8万人以上(2004年)いたのが、5,000人(2007年)にまで急激に減っている。その背景には、エンターテイナー受け入れ30年の歴史があった。1979年が「ジャパゆき」元年と呼ばれる。フィリピンは、戦後の復興をアメリカに委ねていく。基地産業としての性産業が発展し、それが観光産業としての性産業に転換していく。そして、日本人による買春ツアーへの批判の高まり。買春ツアーができなくなると、外貨獲得策としてのエンターテイナーの送り出しに変化していった。1990年代中盤、エンターテイナーの業界団体では入管現役職員が働いていた。プロモーターが入管でブラックリストのコンピューターの操作をしていた。そんな事件も起きている。業界団体の顧問には、元地方入国管理局長がついていたり、「外国人招へい事業を考える国会議員の会」の代表には法務大臣経験者の大物議員がついていた。エンターテイナーの受け入れは厳格化と緩和の繰り返しだった。受け入れを厳格化し、一時人数が減っても、なぜだか受け入れの緩和がなされ、あっという間に人数が増加していく。そうしたことの繰り返しだったのだ。しかし、エンターテイナーの受け入れが人身取引の温床になっているとの批判の声の高まりに押され、2006年にその終止符が打たれた。日本は様々な国からエンターテイナーを受け入れていったが、フィリピンからの受け入れが突出していた。その流れを振り返ってみると、エンターテイナーの送り出しを推し進めるフィリピンと、政治家や官僚の黒い関与を許しながら受け入れ続けた日本との間に特殊な蜜月関係があったと思わざるを得ない。政治家や官僚が関与していくほどにエンターテイナー受け入れをめぐる日比の特殊関係があった。

国際結婚をする人は9,000人程度(2007年)、一方で離婚する人は4,600人程度(2007年)いる。結婚する人は年によって増減があるのに対し、離婚する人の数は右肩上がりである。とりわけ、エンターテイナーの受け入れを厳格化した直後に国際結婚が増加するという特徴がある。国際結婚の姿も多様で様々な出会い方がある。また、日本人との結婚だけではない。しかし、エンターテイナーとして来日し、日本人男性と知り合い、国際結婚していくことが圧倒的に多かった。そして、ドメスティックバイオレンス(DV)といわれる暴力を日本人男性からふるわれ、日本人との間の子どもを日本で育てていくためにこの地でシングルマザーとなっていった。1995年ぐらいからDVの被害を受ける在日フィリピン人の女性が現れ始め、1998年ぐらいから急増していった。

3 在日フィリピン人シングルマザーの苦悩

在日フィリピン人シングルマザー、彼女たちの多くは、1980年代から90年代後半にかけて日本にやってきた。彼女たちはエンターテイナーとして日本にやってきた。彼女たちは自らのことをエンターテイナーとは呼ばず、「タレント」という。しかし、日本での現実とは違っていた。ほとんどがホステスの仕事だった。日本とフィリピンを行き来する人生に疲れ、日本での居残りを決断した人。エンターテイナーに対する入管政策の厳格化により、フィリピンに帰るともう戻ってこれないと知り、日本での居残りを決断した人。その動機は様々だが、日本社会での生き残りをかけて、日本人男性と出会い、結婚していく。このチャンスを彼女たちは失いたくない、なんとかしてものにしたい。それはお金だけではない。フィリピンで実現ができなかった幸せを手に入れたかったのだ。そして、DVの被害にあっていく。でも彼女たちはいう。「ブロークンファミリーは嫌だったの」と。彼女たちにとって家族こそが幸せの象徴なのだ。だから彼女たちは迷う。何とかして幸せを維持することはできないのだろうか。DV被害者の保護にかかわっていると、しばしば、「フィリピン人女性は保護しても結局、旦那のところへすぐ戻ってしまう」、そう口にする関係者の言葉を聞く。でも彼女たちにしてみれば、幸せを維持していくためのもがきなのだろうと思う。しかし、暴力が子どもに向かったとき、彼女たちは決断していく。日本人男性との生活に見切りをつけ、子どもたちと日本で生活をしていこうと。

彼女たちはいう。「日本に来るには『タレント』ぐらいしかなかったでしょ、だからみんなシンガーかダンサーだったの」と。ふと思う。エンターテイナー受け入れをめぐる日比の特殊関係、もしそれがなかったら今のシングルマザーの苦悩は生まれることもなかったのではないかと。しかし、エンターテイナーの受け入れがなかったとしても、また別の形でフィリピンから日本への人の流れができていったであろう。

日本でシングルマザーとして生きる。その生活はそう楽ではなかった。想像していたよりも厳しいものがあつたのではないだろうか。彼女たちは友達や親せき、同郷の人などありとあらゆるネットワークを駆使して生き残れる道を探る。これまで住むところは日本人の男性に縛られていたが、シングルになると彼女たちは自分たちの力で探さなければならない。そうするとこれまで分散していた居住地域が必然的に接近してくる。地域で生き残っていくにはひとりでは困難だ。仲間探しが必要となる。道で出会ったフィリピン人、友人の友人、教会ネットワーク、コミュニティーネットワーク、NGO、様々な経路で仲間を見つけていく。そして、そのネットワークの中で問題を解決していく。

大きいのは仕事探しだ。ほとんどが友人ネットワークの中で仕事を見つけていく。コンビニのお弁当工場や機械の部品検査、ホテルのベッドメイキングなど様々な仕事を得ていく。しかし、昼間の仕事ではせいぜい時給900円程度が限界だ。そうなるとフルに働いても月の稼ぎは10万円ちょっとにしかならない。もっと稼ごうと思えば夜の仕事しかない。飲食店でホステスの仕事ならば時給2,000円近くにはなる。また、工場での夜勤の仕事をすることもある。それで時給1,200円程度にはなる。しかし、そうした仕事は容易ではない。お酒を伴う仕事、睡眠時間を削っての仕事、彼女たちの体は着実に蝕まれていく。そして、子どもたちは家に置き去りにされてしまう。「あのね、ケンちゃん、私ね、

お母さんが夜中の2時くらいに帰ってくるんだけど、それまで怖くて寝られないの。そして、朝学校に行くとき、お母さんはまだ寝ているから一人で起きて学校に行くの。だから、学校から帰ってきてお母さんが仕事にいくまでの時間しか、お母さんと話することができないの」と訴えかけられる。訪問先の家庭で私は、仕事にでるお母さんを見送る子どもたちの寂しそうな背中を何度みたことだろうか。

お母さんたちも子どものことが一番気になる。「だって、一番大切なのは子どものことでしょ」、そう誰しもがいう。子どもに自分の気持ちを伝えたくても言葉の壁から十分に伝えられない。勉強を見てあげたくてもできない。子どもと向き合う時間がほしいと思っても、仕事をしなければいけない。そんな姿を見ていると、子どもは学校でいじめられてもお母さんには話せない。お母さんを悲しませたくないからだ。また、よく父親から言われていた。「フィリピンの料理はくさい」、「お母さんは外国人だからこの日本では無能だ」と。それでも消せない自分のルーツと向き合わざるを得ない。父親はフィリピンのことを馬鹿にし、フィリピンの文化を低く見ていた。子ども自身もいつのまにかそう刷り込まれてしまう。しかし、ふと気づく、自分自身の中のフィリピンの文化・ルーツから逃げられないことを。そのうちに心が爆発してしまう。父が母に暴力をふるう姿を見ていた。父に暴力をふるわれていた。そんな傷が吹き出してしまうこともある。そして、爆発した心が外に広がっていくと非行に走るようになり、内に広がっていくと不登校や引きこもりとなっていく。

日本での生活が長くなると、国の家族のことなんて忘れ去っていくのだろうか。そんなことはない。そう、彼女たちの多くは家族を支えるため、兄弟姉妹を支えるためにこの地にやってきたのだ。エンターテイナーとして働いていたころ、そして、日本人と婚姻していたころはフィリピンに送金できていたかもしれない。しかし、シングルマザーとなり、自分たちが生きていくことだけで精一杯の生活では、お金を送りたくても送れない。両親は高齢化し、病気を抱えていく。兄弟姉妹はそれぞれの家族をもって生活が成り立たない。日本にいる彼女たちはなんとかしたいとがく。そして、借金を繰り返していく。がんばってもがんばってもどうにもならない。この苦しみから抜け出すことができないのだ。家族を思う気持ち、その美しさが逃れられない重みとなって押しかかってくる。

4 カラカサンの歩みとその活動

こうしたシングルマザーと子どもたちが集う場がカラカサンだ。カラカサンとは、フィリピンのタガログ語で「力」を意味する。女性たち自身が力を合わせてこの日本社会で生きていこうという彼女たちの思いがそのまま団体の名前になっている。DVの被害にあい、シングルマザーとなった女性の自立支援、地域で孤立しないようにフォローアップケアを行っている。また、子どもたちのためのプログラムも行っている。子どもたちの多くは、DVの目撃や児童虐待によるトラウマを抱えている。会が正式に設立したのは2002年12月のことで、NGOとしての活動はそう長くない。しかし、前史を含めるとすでにその歩みは10年になる。

ここでは、そのカラカサンの歩みとその活動を紹介したい。

(1) カラカサンの立ち上げ前史

カラカサンの前身は、カトリック教会の外国人支援組織であるカトリック横浜教区滞日外国人と連帯する会（通称：SOL，1992年設立・2002年解散）が立ち上げたフィリピン人女性DVサバイバーの自助グループだった。

(a) SOLの設立

SOLが設立されたきっかけとなったのは、1990年に横浜で開催されたAISA横浜（Asian Institute for Social Action，アジア社会活動研修会）という研修会の実りであった。アジア各国からの聖職者や信者が集い、日本の現実を学び、キリスト教の信仰を問い直す集まりであった。この会議の提言からSOLの前身である「アジアの兄弟と連帯する会」をカトリック横浜教区（教区とは教会における管轄区域のことをいい、横浜教区は、神奈川県、静岡県、長野県、山梨県を管轄する）に設置することが決まった。そして、1991年より準備会として活動を開始していた。一方で、日本のカトリック教会には、アジアからだけでなく、すでにラテンアメリカからの信者も多く来ていたため、現実にあうよう名称を変更し、1992年にカトリック横浜教区滞日外国人と連帯する会として神奈川県川崎市の鹿島田で活動をスタートした。

活動開始当初は、事務局とフィリピンデスクのみであったが、1994年にラテンアメリカデスク、韓国デスクを立ち上げ、各デスクでは当事者スタッフが活動をするという形態が生まれていった。

(b) フィリピンコミュニティとの連携

活動開始当時の1990年代初頭、神奈川県内のいくつかの教会にはすでにフィリピン人のコミュニティが形成されており、SOLのフィリピンデスクでは、コミュニティ形成を援助し、そして共同でプログラム活動を展開していった。

1993年から神奈川県内のコミュニティのリーダーの集まり（コアグループミーティング）を定期的に持ち、各地域の状況を報告し合い、活動を話し合った。同年には、経済的に困窮した同胞を援助するため、緊急財政援助基金を設立した。また、1994年には、行政や港町診療所（横浜市）などの医療機関と協力して、メディカルミッション（無料健康相談会）をフィリピンコミュニティではじめた。

(c) 自助グループの立上げとSOLの閉鎖

コミュニティ活動の一方で、SOLの活動の柱のひとつであった相談活動には日々、多くの問題が持ち込まれ、スタッフはその対応に追われていた。対応しても対応しても限りがないほどに。このまま問題の対応だけをしていてもしょうがないのではないだろうか。私たちのがんばりがむしろ依存関係をつくっているのではないだろうか、という反省がなされていった。

そこで、これまで地域コミュニティづくりを支援に力を入れていたのを、徐々に男性の労働者や女性のグループなどの領域別の自助グループ作りに転換していったのだ。1997年の5月には移住労働者のメーデーを開催し、1999年には「SMP (Samahang Migranteng Pilipino)」というフィリピン人労働者の連帯グループを結成した。一方で女性のグループとして生まれたのが、国際結婚継続組のグループである「FWES (Filipino Wives for Empowerment and Self-reliance)」とDVサバイバーの自助グループの「KALAKASAN (カラカサン)」だった。いずれも1998年に設立され、FWESとカラカサンは実際には活動の大半を共にしていた。女性たちが集まり、活動について話し合う。女性たちは自

立して仕事をしたくても、子どもを預ける保育所が圧倒的に不足していた。いつの日か自分たちの保育所を作ろう、とチャリティーイベントなども開催していた。

こうしたSOLの活動は順調とも思われたが、2002年3月にカトリック教会の機構改革によって閉鎖が決まってしまった。事務局のコーディネーターをしていた私の気配りが足らなかったこともひとつの原因だったかと思う。

(2) カラカサンの設立以後のこと

(a) 再生に向けて

しかし、カラカサンの活動は継続していった。2002年3月29日にSOLの事務所は完全に閉鎖されたが、翌週の4月2日には新たなカラカサンの設立準備を開始している。そして、残された仲間でも今後の活動についての話し合いを開始した。そこには2つの選択肢があった。活動の拠点をもたない小さな自助グループとしてやっていくのか、拠点をもち、ひとつの組織として活動を継続していくのか、ということだった。居場所を失った女性たちの声は圧倒的に後者の道を選んだ。といっても手持ちの資金は、以前にやった保育所をつくるためのチャリティーイベントの収益金の10万円ちょっとしかなかった。しかし、懸命に資金作りをし、なんとか拠点を有する見込みが立ってきた。

こうして、2002年8月より今の事務所のあるアパートを借り、12月7日に設立集会を行った。

(b) 設立当初の活動

カラカサンの設立当初、これからどんな活動をしていくべきなのか頻りに話し合っていた。初期の話し合いの中では、相談活動よりも自立支援に力を注ぎたい、だから相談活動はやめようという意見も出されていた。しかし、私たちが考える間もなく相談は入ってくるため、結局、理屈よりも日々の対応に追われ、今日に至っている。

また、女性たちの話し合いで印象深かったことがある。自分たちが日本に来て、いろいろ苦労してきた。暴力の被害にあい、生きている感じがしなかった。今こうして困難を乗り越え、力をあわせてがんばっている。この日本で自分たちができることは何なのか。そんなことを話し合っていた。女性たちは口をそろえ、「料理」と「子育て」だ、と意気投合していた。それをカラカサンで実現させたいと考える。

そこで始まったのが、ルンピアプロジェクトだ。ルンピアというフィリピン風の春巻きを売り、活動の資金を作る。いずれはフィリピン料理のケータリングを事業化しようと考えていた。残念ながら、本格的に営業をはじめするにはノウハウも資金も活動の余力もなく実現しなかったが、このルンピアは地域の方々にはとても好評で今でも地域のお祭りなどにカラカサンがお店を出す時の定番メニューとなっている。

もう一つの保育所の方だが、これも正式に事業化するには困難があった。そこでメンバーで話し合いを重ねていった。ちょうどその時、カラカサンの下の部屋の住民が引っ越していった。これはチャンスと話し合いを急ピッチに進め、部屋を借りて、女性たちが自分たちの責任で共同保育を行う場を作ることになった。これまでの夢を実現することができた。2003年の6月のことだった。しかし、運営が大変だった。資金はカラカサン本体で捻出することはできないので女性たちの力でやることになっ

ていた。だが、そのお金を払える人がなかなかいない。結局、お金が続かず、1年間で店じまいしてしまった。それでもこの場は、女性たちと子どもたちの居場所となり、連日、時間のある女性たちや子どもたちが自由に集い、交流し、絆を深めることができた。

その他にも、暴力で傷ついた心と体を癒すためのマッサージやセラピーなどのヒーリングプロジェクトやバイブルシェアリング(聖書の分かち合い)、学習活動、地域や諸団体とのネットワーク作り、暴力のない世界、そして暴力からの保護の充実を求めている提言活動などなど、とにかく盛りだくさんのことをやっていた。プロジェクトの名前にすると10個を超す勢いだった。

(c) 子どもプログラム

女性たちがもうひとつ気になっていたことがあった。それは自分たちの子どものことだった。自分たちの子どもが父親のいない生活で悲しい思いをしていないか、さみしい思いをしていないか、学校でいじめられていないか、フィリピンの文化を受け入れてくれるのだろうか。子どものことがとにかく心配だった。そこで始まったのが、初期の子どもプログラムだった。英語の教室とフィリピンの文化を座学で勉強するような教室が主な内容だった。私はどうしてタガログ語じゃなくて英語なんだろうと疑問に思い、ある時、女性たちに聞いてみた。「だって、子どもたちが英語を話せば、私とのコミュニケーションに苦労しないでしょ。それにただでさえ父親がいない、外国人、生活は大変、と引け目が多いんだから、少しぐらい他の子よりも前進させてあげたいの」と口をそろえて言っていた。ただ、この子どもの教室も子どもたちにはそんなに好評ではなかった。いかんせん、お母さんたちに首根っこ掴まれてくる子が多かったから。

その子どもプログラムが変化したのは、2004年6月のことだった。ある日、私が事務所にいると一人の中学校に上がった女の子が私のところに来た。そして、彼女は隠すようにして自分で描いた絵を見せてくれた。それが非常に衝撃的なものだった。自分自身が鎖でぐるぐる巻きにしばられ、そして「どうして?」と涙を流しながら嘆いている絵、そして、人形をナイフで八つ裂きにしている絵などがスケッチブックの最初から最後まで描かれていた。その子は、小学校の時は非常に活発で明るい子だった。しかし、中学校に入ると、急激に生きる気力を失っていった。それからカラカサンに関わる女性たちの子どものことを思い返してみた。引きこもりになっている子、不登校になっている子、お母さんとのコミュニケーションに悩んでいる子、そして、多くの子がフィリピンの文化を受け入れられず、フィリピン料理を「きらい」と言っていた。見回してみるとたくさんの課題を背負っている子どもたちが多くいることに気づいた。これまで小さかった子どもたちがだんだんと大きくなってきており、待ったなしでの対応が迫られていた。こうして、新たな子どものプログラムが生まれていった。

具体的にしていることは、毎月、様々な地域に住む子どもたちと女性たちが集まり、野外活動などを行っている。内容は大了たことはないかもしれない。潮干狩りに行ったり、みかん狩りに行ったり、夏はキャンプに行ったりしているだけだ。それでも、とにかく難しいことを考えずに、子どもたちが集まり、出会い、交流することにより新たな絆が生まれていっている。そして、月に1~2回程度、フィリピンの料理や踊りなどを学ぶ教室、週1回の英会話の教室、事務所を開放しての子どものためのフリースペースなどを行っているほか、私たちの方から子どもたちの家々を訪問し、部屋の中で話を聞いたり、一緒に遊んだりしている。

(d) フォローアップケアプログラム

女性たちを対象としたプログラムも行っている。その中心がFPAR (Feminist Participatory Research Action, フェミニスト参加型アクションリサーチ)という活動だ。

女性たちが定期的集まり、自分たちの悩みを話し合う。小さなグループで集まる時もあれば、地域で集まることもある。地域を越えて集まることもある。人生の分かち合いであったり、聖書の分かち合いであったり、時には演劇という手法を用いたり、様々な方法で思いの共有化を図っていき、具体的な行動につなげていく。こうした活動である。

これまでもいくつかの成果がある。そのうちの一つが「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」の第23条だ。「配偶者からの暴力に係る被害者の保護、捜査、裁判等に職務上関係のある者は、……被害者の国籍、障害の有無等を問わずその人権を尊重するとともに、その安全の確保及び秘密の保持に十分な配慮をしなければならない」と規定されている。この規定に「国籍」という言葉を入れてもらえたのは、カラカサンの女性たちが自らの経験や思いを立法過程で訴えていった、その力によるところが大きかった。

こうした分かち合いだけではない。女性たちの中には、地域で孤立し、子育てや仕事のストレス、様々な悩みから精神的なバランスを崩してしまうことも決して少なくはない。

とりわけDVのトラウマを抱えている女性たちは、暴力からの保護、その後の家探し、生活保護、子どもの転校、夫との離婚、在留資格などなどの手続きをひと通り支援すれば地域で落ち着いた生活ができるとは限らない。こうした手続きを終えて仕事をはじめたころ、彼女たち自身も「もう大丈夫」と思う。しかし、仕事をはじめ、私たちの前に顔をあまり出さなくなってからしばらくして再会すると、精神疾患にかかっていたということがたびたびあった。時には、私たちが訪問するとすでに意識がはっきりしないほど心と体のバランスを崩し、ガリガリに痩せ細ってしまっていたり、体を震わせながらうずくまっていたり、薬を大量に摂取してしまっていたこともあった。こうした女性たちに医療機関や専門機関に行くようにアドバイスをするが、なかなか行くことはない。彼女たちが専門機関などにつながれるのは病状が相当に重くなってからということもある。

私たちは彼女たちの家を訪問し、彼女たちが孤立しないように支えている。専門機関につながれるように支えている。地域で孤立することなく悪戦苦闘しながらも生活ができるように支える活動も、このプログラムの重要な柱となっている。

5 シングルマザーと子どもたちの日常の風景から見える「断絶」と「つながり」

私は、時間のある時にシングルマザーと子どもたちの家庭を訪問している。行き先で待っているのは、悪戦苦闘する女性たちと子どもたちの日常である。しかし、その日常の中から様々なものが見えてくる。なお、登場人物の名前はすべて仮名にしてある。

ジャネット、彼女は1987年来日した。彼女はエンターテイナーとして来日したわけではなかった。

日本人と結婚して日本にやってきた。しかし、実質的に結婚生活をしていた時期は数カ月しかない。お店でホステスの仕事をしていた。その後、幾人かの日本人、そしてフィリピン人男性と関係を持っていた。4人いる子どもも、そのうちの2人の父は別々の日本人、残りの2人は別々のフィリピン人だ。そのうち2人の子どもは今、施設に預けられている。彼女はたくましい。2人目の子どもを産んだ時、彼女は困窮していた。自宅で出産し、友達の助けで救急車を呼び、病院に運ばれる。それでも生活のため、2日後には子どもを病院においたまま、自主的に家に戻り、仕事を始めた。その後、シングルマザーとして子どもを育て、地域でサバイバルな日々を生き抜いている。

セシルが来日したのは1998年のことだ。彼女もエンターテイナーとして来日し、日本人と結婚した。彼女の場合、暴力はふるわれることはなかったが、仕事から抜け出す時、やくざに追われ、その日本人男性との逃亡が続いていた。そうした生活に疲れ、離婚した。その男性との間には子どもはいなかったが、その後、フィリピンから子どもを呼び寄せた。

ジョイは、1985年にエンターテイナーとして日本にはじめて来た。高校を卒業し、フィリピン人との間に子どもが3人おり、その子どもを支えるために日本に来たのだ。その後、1991年に再びエンターテイナーとして来日した時に、お店で知り合った日本人男性と結婚する。そして、暴力をふるわれていった。

アンナが来日したのは1999年、エンターテイナーとして。そして、日本人男性と同棲し、子どもを産んだ。しかし、その日本人男性と結婚することなく、暴力をふるわれていった。

クリスティーナが来日したのは1989年だ。日本にエンターテイナーとして来て知り合った日本人男性と結婚していた親せきから日本人男性を紹介され、マニラで結婚し、来日している。また、彼女はホステスの仕事をしたことはほとんどない。一番上の子どもを産んだ後、暴力をふるわれるようになり、暴力から逃れるため日本人男性のところから去り、その後は、各地を転々としながらこの地にたどりついた。2番目の子どもはフィリピンにいる。その間に知り合った他の国籍の外国人との間の子どもだ。そして、3番目の子どもはフィリピン人との間の子どもだ。

デイシーが来日したのは1991年のことだ。彼女は家事労働者として来日している。その後、お店でホステスの仕事を転々としながら生活をしていた。いちばん上の子どもの父親は他の国籍の男性、そして、その後の子どもの父親は別々のフィリピン人男性だ。その間、何回か中絶もしている。

リンダが来日したのは、1986年ごろだ。やはりエンターテイナーとして来日し、お店で知り合った日本人男性と1987年に結婚した。この中では唯一、結婚が継続している。

その日は、A地域周辺に住むフィリピン人女性と子どもたちの家を数軒訪問しようと考えていた。駅のすぐ近くにジャネットの住むアパートがある。そこにちょっと立ち寄る。非常に古い木造アパート。入ると玄関があり、その両脇に薄い木戸で仕切られた部屋がある。そして、目の前には、黒光りした木の階段。階段というより壁に近いぐらいの角度だ。上に上がってみるが、その日、ジャネットはいなかった。仕事を失った彼女の生活は日に日に厳しくなっており、ジャネットは友達の赤ちゃんのベビーシッターをして生計を立てている。最近、顔を見せないで、どうしているのかと思ったが、やはり今日もベビーシッターに行っているようだ。下の階に住む別のフィリピン人と雑談をちょっとして、ア

パートを後にした。

そして、セシルの家に向かう。彼女と初めてあった時、彼女はやくざとのトラブルから首にはコルセットを巻いていた。当時の彼女はとても物静かな女性で、彼女が自分から話をすることはほとんどなかった。その後、彼女は小学校に上がる年の子どもをフィリピンから呼び寄せた。親子2人での生活。子どもはさみしさからよくカラカサンに顔を出した。その子どもが最近すっかりカラカサンに来なくなっていた。実は、最近、セシルはジャネットと大喧嘩をしていた。ジャネットは、生活に困り、家賃を長いこと滞納していた。そして、食べるものもない生活が続いていた。そんなジャネットのことは見てられなくなったセシルは、彼女を呼んで一緒に食事を作り励ましていた。そして、ジャネットの家族はセシルの家に泊まる日が増えていった。こうした支え合いの姿がフィリピン人の中では昔からよく見られる。しかし、共同生活がはじまりしばらくすると負担が増し、距離があまりにも近くなってしまったのか、喧嘩に発展する。それまでの支え合いの美しい姿が一気に崩壊し、憎しみが爆発する。そうなるとうにも止まらない。今回の彼女たちの喧嘩では、大人同士の関係が壊れただけではなかった。傷ついていったのは、一緒にいた子どもたちだった。こうしてセシルの子どもはその日から全くカラカサンに顔を見せなくなってしまった。カラカサンのスタッフも心配するが、こうなってしまうとフィリピン人からの電話には一切出なくなる。そして、家に行ってもドアを閉ざしてしまう。そんな時、私が出ていく。フィリピン人のつながりの中で傷ついてしまった彼女たちは、フィリピン人ではない私のことを比較的受け入れてくれる。フィリピン人ではない、女性ではない、でもタガログ語を理解する、そして子どもたちとの距離が近く、多くの場合、子どもたちのニノン（タガログ語でキリスト教の洗礼を受ける時の後見人を意味する）であるからだろう。案の定、セシルは私の訪問は受け入れてくれた。そして、しばらく話をする。仕事から帰ってきたばかりの彼女が夕飯を作るために買い物にいつている間、子どもと2人でいろいろと話をした。彼女はさみしそうに言った。「お母さんがカラカサンに行くなというの」と。買い物から帰ってきたセシルも交え、彼女たちがつながりの中に戻ってこれるように一生懸命話をした。彼女は、「もうフィリピン人は嫌だ。日本人がいいね、つきあうのは」と言っていた。しかし、彼女には日本国籍の知り合いは私のほか、もう1人しかいないのを知っている。私は、彼女たちがつながりを断絶することなく、豊かな関係性の中で悪戦苦闘の毎日を生きてくればよいと思う。

それから、彼女の家を後にして、ジョイの家に向かう。冒頭に紹介をした10年前に紙を破りまくった子の家庭だ。セシルが教えてくれていた。こないだジョイが彼女のところに突然来たらしい。子どもたちと大喧嘩をしたジョイは子どもをおいて家を飛び出し、彼女のところに來た。そして、ジョイは「今日はあなたの家に泊めて」と言い出した。セシルはしょうがないと思い、了承した。ジョイはセシルと一緒に飲もうと誘った。セシルは部屋にあったワインを出したが、ジョイはもっと強い酒を飲みたいと言い出し、ひとり飲み屋に行くと言って出て行った。そして、彼女が部屋に戻ってきたのは夜中の2時30分だったそうだ。そんな話を聞き、心配になったからだ。

電話をすると下の男の子が電話に出た。そして、お母さんはいないという。時計を見る午後8時を過ぎたころだった。お母さんは6時ぐらいに家をでてサウナに行ったという。私はこれから訪問することを告げ、その時は「いいよ」と言ってくれていた。その電話から彼らの住むアパートの玄関に着くまで5分も経っていなかった。しかし、彼らは玄関のドアを開けてくれなかった。玄関の呼び鈴を押しても、

電話をかけても、応答をしてくれない。きっと今日はお姉ちゃんの機嫌が悪かったのだろう。引きこもりが続く彼女が私の訪問を受け入れてくれるのは数回に1回程度だ。重い鉄の扉の前に立ち、部屋の中の様子を想像する。この扉の向こうの世界が彼女たちにとっての世界のほとんどを占める。そんな狭い世界でも彼女たちが非常にたくましく豊かな世界に生きていることを私は知っている。しばらく彼女たちの日々を祈り、その日は後にすることにした。

そして、そこからすぐの所に住むアンナの家に寄ってみようと思った。先日、夜、突然、彼女からパニック状態で電話があった。息子がアパートから駆け出した瞬間、自転車に衝突し、けがをしてしまった。自転車に乗っていた日本人の男性も慌て、近くの病院に彼女たちを連れていったところだった。電話越しに看護師さんの話を通訳し、彼女も少し、安心することができた。その時、アンナは私にセシルのところに行くように勧めていた。娘が部屋の鍵をあけてくれないのと、パニックになってセシルはアンナに電話をかけてきた。それで、アンナはセシルの家に大急ぎで行こうとして家を出た時、息子が事故にあってしまったのだ。彼女に電話をしてみたが、留守電になってしまっていた。

今度は、クリスティーナの家に向かう。電話をしてみるがいつもどおり電話にでない。アパートに直接向かい、呼び鈴を押してみる。部屋には明かりがついているが誰も出てくれない。しばらくすると娘が部屋の中から声をかけてくれた。「あ、ケンちゃんか。お母さんね、どっか行っていて今いないの。それに今、シャワー浴びている最中だから、ごめん、許して」と。弟のジェイソンはもう寝てしまっているようだ。そう、彼はセシルの娘とクラスメイトだ。お母さんが行っている先はだいたい予想がつく。こんな夜に子どもをおいてどこに行っているんだと思うが、子どもたちはもうそれに慣れている。その後、彼女から電話があったのは、11時を過ぎたところだった。あっけらかんと「ケンちゃん、今日うち来たんだって、なんかあったの？ 電話くれればすぐ戻ったのに」と。

最後にそこからしばらく行ったところにすむデイシーの家に向かう。デイシーはもともとジャネットと一緒に住んでいた。生活の厳しい者同士、部屋を分かち合い、生活を分かち合っていた。子どもたち同士も血のつながりはないのに姉妹のように一緒に生きていた。それが案の定、金銭トラブルから仲違い、別々のアパートに引っ越していったのだ。それ以来、デイシーの家族はカラカサンから疎遠になっていた。デイシーの娘はジャネットの娘と同じ中学に在籍しているので、ジャネットの娘に学校での様子を聞いてみたが、もうしばらく学校には来ていないようだ。彼女はこれまで何回、転校を繰り返したのだろうか。家賃が払えなくなり、次のアパートを探し、そしてまた家賃が払えなくなり、引っ越していく。そのたびに子どもたちは転校する羽目になる。そして、一時的に不登校になる。長女のアイは中学だけで4回転校している。そして妹たちも小学校4年の間に5回ぐらいは転校を繰り返している。アイももう高校受験だ。なんとかして受験してもらいたいと思う。

彼女に電話をすると元気な声で電話に出てくれた。そして、仕事から帰ってきたばかりのお母さんも喜んで私を待ってくれるという。

デイシーの家に着くと、仕事から帰ったばかりの彼女が食事を作っていた。腕にはサポーターを巻いている。最近はスーパーの倉庫で働いているらしい。年末のこの時期、かなり忙しく体にこたえるという。彼女は、たくさんの病気を抱えていた。しかし、生活のため、病院に行かないことが多かった。アパートに上がる階段をぜいぜい言いながらしんどそうに上っていたこともあった。お医者さんか

らは「あと1週間病院に来るのが遅れていたら死んでいたよ」と忠告をされたこともあった。そんな彼女だが、腕はさておき、体は元気そうだ。彼女が作ってくれた食事を家族と一緒に食べ、会話を楽しんだ。

そして、デイシーはうれしかったらしく近くに住むリンダに電話をした。「ケンちゃんが来たからおいでよ」と。でもリンダは私を自分のアパートに招待したいらしく、長女のアイが案内してくれた。久しぶりの再会だった。リンダは今でも日本人男性と結婚を続けている。そして、夫は一軒家を持っていた。一時期、ジャネットもデイシーもリンダの家で共同生活をしていた。そしてこの3家族の子どもたちは運命を分かち合いながら、肩を寄せ合い生きていた。それが離れ離れになってしまった。リンダは借金を重ね、気づいた時にはどうにもならない額になっていた。結局、持家を売らざるを得なくなってしまった。

リンダの娘は日本生まれだ。学校でのいじめに傷つき、中学に上がったころにはすでに力を使い果たし、消耗していた。「もう高校には行かない。疲れた」と訴える彼女と2年間かけて話し合いをして、ようやく高校に行く気になってくれた。でも公立の学校に行くこととまたいじめられることを恐れて、私立の学校に行くことにしたという。お金のことが心配になり、リンダと話し合おうとするが、私が家に行っても会ってくれなかった。娘に聞くと、お金のことはお母さんが大丈夫だと言っているという。彼女もがんばり、私立の高校に合格した。でも、案の定だった。入学金が払えず高校に行けなくなったという。そして、しばらくするとリンダは娘を一人、フィリピンに送り帰してしまった。フィリピンの実家に預けて、向こうで高校に入学させる、という。フィリピンに帰る時、私が車で成田空港まで送って行った。あれからもう2年半が経つ。そんな娘の写真をを見せてもらった。今ではすっかりタガログ語もペラペラになっているという。最近、アイは、リンダと気があうらしく、自分の家で寝るよりリンダの部屋で寝泊まりすることが多いという。アイには高校になんとでも行ってもらいたい。しかし、今日はアイがこうして「つながり」のうちに生きていることがうれしくなる。

6 まとめ——カラカサンの果たしている役割

カラカサンのやっていることは何なのだろうか。DV被害者の自立支援なのだろうか、子どもたちのケアなのだろうか、母子家庭の支援なのだろうか、それとも多文化共生の実現にむけてのチャレンジなのだろうか。

先程、紹介した女性たちは、実際にほとんどがエンターテイナーとして来日し、日本人男性と知り合い、DVの被害にあい、その後、シングルマザーとして子どもと一緒に日本で生活している。

彼女たちは、まだ男性との結婚生活が終わりをむかえる前、暴力をふるわれていることを誰にも話すことができないでいた。いや、同国人の女性たちとのつきあいを禁止され、もともと限られた人間関係しかもつことができなかった。限られた同国人の友人も夫の知り合いである場合が多く、もし話をするとさらなる暴力をふるわれてしまう可能性もあった。それ以上に幸せを維持したかったのだ。こうして誰にも自分の身に起きていることを打ち明けることができなくなり、孤立していった。

しかし、暴力が子どもに向かった時、彼女たちは夫のもとを去り、母と子での生活を決意する。たとえ、

その生活が、在留資格や社会保障などから排除され、さらに社会から隔絶され、孤立した生活となるにしても。

彼女たちが地域での生活を生き抜くためには「つながり」を必要とする。彼女たちはそれを求め、カラカサンを通して出会っていく。先程の女性たちの多くも実際にそうだった。それはプログラムという形での出会いだけではない。子どもの集まりに参加した時であったり、事務所に併設している居場所にぶらっと来た時であったり、相談に来た時であったり、その他にもキャンプやクリスマスパーティーなど、カラカサンには様々な出会いの場がある。そうした出合いを繰り返すことにより、彼女たちの距離は徐々に狭まってくる。

これまで彼女たちは、自分の経験はほとんど誰にも話したことがなかった。同じような状況にある同国人のシングルマザーの友達に対しても話したことがなかった。多くの場合、フィリピンの家族や兄弟の生活を支えるため、エンターテイナーとして日本に来て、日本人と結婚し、DVの被害にあい、子どもを育てるために日本での定住を決意したという共通の背景があるにしても。ましてや、国際結婚継続組の同国人には到底、自らの失敗を打ち明けることはできない。また、そういった個人的なことを話することができる日本人や他の国籍の知り合いや友達がいることはまれである。決して失敗ではないにもかかわらず、「ブローケンファミリー」になってしまったことを、幸運を手に入れることができなかった失敗と感じてしまうことが多い。そして、思い出したくない過去として封印してしまうのだ。いや、過去だけでなく、今の生活の姿も覆い隠してしまう。こうして封印しようとする願望が、他者との「つながり」からの「断絶」を選んでしまう。

しかし、出合いの中で彼女たちは徐々に気づいていく。自分が失敗だと思っていたことが、実はその場にいる他者と共通の経験であったことを。そして、徐々に距離が近くなっていったある日、その思いをふと伝えてみる。そこに小さな共感が生まれてくる。まだ誰の目にも見えないような小さな共感だ。こうした共感が次の参加につながっていく。そして、会うたびに最近の生活についての話や子どものこと、いろんな世間話ができるようになる。そうすると、小さな共感が過去の経験に対する共感だけでなく、日々の生活で今経験していることに対する共感でもあることにも気づいていく。そして、徐々に個人間だけでなく、同じ地域に住む仲間に広がっていく、そして地域を越えて広がっていく。経験に対する共感が広がっていくのだ。こうして「つながり」が生まれていく。

だが、カラカサンとの「つながり」は必ずしも強固なものではない。先程の女性たち、そのほとんどと10年近くのつきあいがあるにもかかわらず、彼女たちはカラカサンに強くコミットしているわけではない。セシルはあまりカラカサンに顔を出さない。むしろ、彼女の抱える問題を解決しようと相談の時間を入れても彼女はいつもすぼかしていた。ジャネットも来たり来なかったりと、決して私たちの活動に積極的に参加し、何かしらの役割を担うというわけではない。他の女性たちにしても同じような感じであった。それでも私たちは彼女たちとの関係を断つことなく、ひたすらに関係を持ち続け、かろうじてつながっていた。

その一方で、カラカサンで作った「つながり」が地域の中では豊かに生きている。彼女たちの日常は悪戦苦闘の連続である。それを「つながり」の中で生き抜いているのだ。しばしば、その「つながり」の中で傷つき、その「つながり」を「断絶」していく。ジャネットとセシルが関係を断ち、セシルとジョ

イが大喧嘩をし、以前、ジャネットとデイシーが仲たがいでいったように。しかし、私たちはその「断絶」に寄り添う。彼女たちが再び「つながり」の中に戻ってきてくれることを信じて。そして、「つながり」が取り戻される。しかし、再び「断絶」が生じる。こうして「つながり」と「断絶」の連なりが生まれていくのだ。

カラカサンのなしていること、それは彼女たちの「断絶」と「つながり」の連なりに寄り添いながら、彼女たちが孤立することなくこの地で生き抜いていくことができる場を作ること、そうしたことなのかと今、私は思っている。

参考資料 在日フィリピン人に関する統計

	外国人登録者数							興行ビザ 新規入国者数		不法残留者数				国際 結婚	離婚	出生	生活 保護
	総 数	うち、フィリピン国籍						総 数	うち、 フィリピン 国籍	総 数	うち、フィリピン国籍			夫 フィリピン・ 妻日本 または、 夫日本・妻 フィリピン、 または、 夫フィリピン・ 妻日本	父 日本・母 フィリピン、 または、 父フィリピン・ 母日本	世帯主 フィリピン (世帯数)	
		合 計	男	女	日本人の 配偶者等	定 住 者	永 住 者				合 計	男	女				
1984	840,885	9,618	1,929	7,689	2,967	—	192	32,952	11,941	—	—	—	—	—	—	—	—
1990	1,075,317	49,092	5,832	43,260	20,516	1,190	1,083	75,091	42,738	106,497	23,805	10,761	13,044	—	—	—	38
1992	1,281,644	62,218	8,352	53,866	28,351	2,617	1,461	84,368	50,976	278,892	31,974	14,935	17,039	5,825	1,021	4,695	39
1995	1,362,371	74,297	11,203	63,094	39,909	4,740	4,120	59,833	24,622	286,704	39,763	16,056	23,707	7,240	1,499	5,571	101
1997	1,482,707	93,265	13,771	79,497	44,545	6,751	8,111	67,475	31,585	282,986	42,547	15,818	26,729	6,096	2,269	5,303	252
2000	1,686,444	144,871	21,662	123,209	46,265	13,285	20,933	103,264	60,455	251,697	36,379	13,235	23,144	7,628	2,882	4,856	597
2004	1,973,747	199,394	35,374	164,020	43,817	23,756	47,407	134,879	82,741	219,418	31,428	10,471	20,957	8,517	3,479	4,701	1,834
2005	2,011,555	187,261	38,320	148,941	45,148	26,811	53,430	99,342	47,765	207,299	30,619	10,245	20,374	10,429	3,569	4,572	2,123
2006	2,084,919	193,488	41,178	152,310	49,195	29,907	60,225	48,249	8,608	193,745	30,777	10,612	20,165	12,345	4,170	5,143	2,399
2007	2,152,973	202,592	44,447	158,145	51,076	33,332	67,131	38,855	5,533	170,839	28,491	9,323	19,168	9,379	4,737	5,295	—

出典：外国人登録者数は在留外国人統計、興行ビザ新規入国者数は出入国管理統計年報、不法残留者数は法務省、国際結婚・離婚・出生は厚生労働省人口動態調査、生活保護は厚生労働省の被保護者全国一斉調査より。(各年7月1日現在)

《参考文献》

- ・DAWN編著(2005)『フィリピン女性エンターテイナーの夢と現実——マニラ、東京に生きる』明石書店
- ・JICC出版局(1986)『ジャパゆきさん物語』(別冊宝島54)
- ・石山永一郎(1989)『フィリピン出稼ぎ労働者——夢を追う日本に生きて』柘植書房
- ・カラカサン＝IMADR-JC編(2006)『移住女性が切り拓くエンパワメントの道——DVを受けたフィリピン女性が語る』解放出版社
- ・国立民族学博物館編(2004)『多みんぞくニホン——在日外国人のくらし』千里文化財団
- ・坂中英徳(2005)『入管戦記』講談社
- ・武田丈編(2005)『フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー——エンパワメントとその支援』関西学院大学出版会
- ・ななこびやおき(2005)『ブエノス・ディアス、ニッポン——外国人が生きる「もうひとつのニッポン」』ラティエナ
- ・山谷哲夫(2005)『じゃばゆきさん』岩波書店

Filipina Single Mothers and Their Children

An NGO's Close Accompaniment of Filipinas in a Series of Fluctuations between Connections and Disconnections within Their Communities

SUZUKI Ken

KALAKASAN Migrant Women Empowerment Center

Keywords: Filipinos in Japan, Single mothers, NGO

In recent years the number of migrant Filipina single mothers and their children has grown steadily. Many women came to Japan as entertainers, met Japanese men, married, and eventually became victims of violence. Fleeing from their abusive husbands, these women resolved to live through and go beyond their struggles. They are determined to survive with their children in Japanese society.

Life as a single mother is filled with great difficulties. The women are confronted with many problems related to work, nurturing their children, maternal-child relationships, relationships with families overseas, as well as maintaining their own health and well-being.

KALAKASAN is an NGO that supports these single mothers and their children living in Japan. These women and children are the main participants of the Follow-up Program (for migrant women survivors of DV) and the Children's Program.

Single mothers and their children meet each other through programs sponsored by KALAKASAN. They establish connections and build communities in areas where they live. By supporting and enriching each other in their daily lives, they make it possible for themselves to overcome their daily uphill struggles. But within these connected communities, misunderstandings and conflicts often arise. This leads to a discontinuity of connections and eventual social isolation. However, through outreach interventions the women are able to re-connect with their support communities, become cohesive, and once again give and receive mutual support. Many women go through cycles of connections and disconnections.

One of the roles of KALAKASAN is to extend warm and unconditional encouragement to individual women and communities to prevent exclusion, social isolation and loneliness.